

Collingwood の inside/outside of event をめぐって

河 瀬 明 雄

I

「過去の出来事を理解しようとする歴史家は出来事を外側（outside）と内側（inside）との二つに区分する。ここでいう出来事の外側とは物体及びその運動によって表現されるところのものを意味する。例えば軍団を率いたシーザーが某日ルビコン河を渡るとか、別の某日元老院の建物の床に彼の鮮血が流れるとかいったこと。出来事の内側ということで私は思考（Thought）によってあらわされるものを意味する。例えばシーザーの共和法への挑戦あるいは彼自身と彼を暗殺した人達との間の政治方針に関する対立・衝突。歴史家はこの二つの中の一つ方を排除して、もう一方のものだけに関わるようなことをしてはならない。歴史家は単なる出来事（この場合内側を含まない外側のみの出来事を指す）ではなく行為を理解するのであって、行為とは出来事の外側と内側の統合されたものである。ルビコン渡河を共和法との関連に於てはじめて、又シーザーの流血は政策上の対立との関連に於てはじめて歴史家は関心を抱くのである。彼の仕事は出来事の外側の発見によって始まるだろうが、これだけでは決して完了しない。すなわち彼は出来事とは行為であったということ、そして又彼の主たる任務は、この行為に自分を置いて考えること、行為者の思考を認識することであるという点を常に心に留め置かなければならない。自然の場合には出来事の外側と内側との区別が生じない。自然の出来事は科学者がその思考を追求しようとしている行為者の行為ではなく、単なる出来事である。歴史家と同様科学者は出来事の単なる発見を超えてゆかなければならないということとは云うまでもない。しかし彼の進む方向は非常に異っている。」（R. G. Collingwood;

The Idea of History, P. 213~214)

これは彼が歴史的思考に関して論じた中で展開した inside/outside of

event の特徴の説明であるが、これに対して Patrick Gardiner は次のように批判している。

「〔Collingwood のこの〕文章には注意しなければならぬ点が二つある。即ち(1)歴史と自然科学との間の差違の強調、(2)その差別は歴史家は思想に関わるべきで、その思想の物的‘表示’には関わらないということ、以上の点である。繰返えしていうならば、歴史は歴史的対象の性質からして他の研究と区別されるということである。

人間の感情や行動が一定の型の状況に於ては規則性をもった生起をあらわすということが真であり、又心理学がこうした規則性についての仮説を生むことがあるかも知れないが、このような一般的仮説を参照するだけで人間の行動を常に説明できるとか、あるいはいつも説明したいなどというのではない。というわけは人間の行動はその反応的面だけではなくて目的、計算的、計画的な面も有するものであると考えるから、更に又我々には歴史と科学との間になされた上記の区別が‘出来事、の運動は人間の意図を参照して説明するもの’でない限りに於ては有効であることを認めなければならない。ところが実際はこうした参照によって人間の行為は説明される。我々は理由のある、あるいは動機づけられた‘事態’に関して語らない。

以上のことがすべて正しいとしても尚且つ Collingwood からの引用を含めて、この点の公式化は不自然であり、誤解を招く恐れがあると私はいいたい。不自然だというのは、例えば我々は人間の行為を‘inside, ‘outside, の二つに分けては論じられないから、すなわち差別は通常何がなされたかと何故なされたか(What was done/why it was done)という形に於てなされるものである。又誤解であるというのは、例えば空間的陰喩の導入は出来事の‘inside, と名付けられたものは車輪を廻らす目に見えないエンジンのような奇妙な物体であるという印象を与えるからである。そしてこれから歴史的出来事の内側を‘知る、ために(そこでの知は知識による知である)これらのものを調べるある特殊な技術、微生物学者や天文学者が顕微鏡や望遠鏡を使用するのと同じようなことが要求される。しかし乍ら勿論詳細には違っている。このようにして歴史家というものは非常に〔把握するのに〕困難な、強情な実体(本質)——思

考、意図、計画‘心的過程、——を‘直観、‘過去の経験の re-enactment、等によって調べる人であるという一つの像が示される。Collingwood の言葉を借りていうならば、“他の誰かの思考の働きを知ることは、この同じ働きが私の心の中で re-enact できるのだという仮定に立って始めて可能である、”ということになる。

ところでこれは奇妙な絵であり、少くとも Collingwood 自身にとってはそうでなかったのだが、大きな困難にぶつかる。“心理学によって歴史を理解する、”として Dilthey を批判した彼は“時間の外側にあるのは思想の対象だけではなく思想の行為も亦そうである。この意味で少くとも思想の唯一、同一の行為は時間という距りを通してもちこたえ、それが休止している場合にはずっと後で再生することができる、”このようにして歴史家の主題は簡単には拡大されない。‘思想、と同様彼は‘思想の対象、を（従って又意図の対象、計画の対象等々を）も取上げなければならない。思索者が努力をすれば必ず分ち合えるという無時間性をこの新しい態度は付加したのである。

ここで混乱していることは日常用いる意味での事物と所謂“心的出来事、”との一様化である。外界の普通の‘物的、中味と我々の思想・意図等の区別を（正しく）主張したにもかかわらず、彼が攻撃したものとそう距っていない立場にあるということは、まことに Collingwood のこの問題に対する取扱いからみて皮肉なことである。真の結果は歴史の主題についての理論を生み出すことである。そこでは歴史的出来事の‘inside、は我々を取巻いて生起する物的出来事と同じように捉えられている。——道路を横断する人、学校へ通う人——尚、見ることも触れることも聞くこともできないという意味で又彼らが‘時間の外に、（又おそらく‘空間外に、）存在するという意味で違っている。又この方法に於ては歴史の主題は全く神秘的なものにみえ、仮の操作や秘儀的方法を必要とする。我々はこうした条件の下でいかにすれば‘他人の思考活動を知る、ことができるかを尋ねる。』(The Nature of Historical Explanation, p.47~49)

Collingwood の主張をうけて、これを批判した Gardiner の論を要約すれば次のようになると思う。すなわち Collingwood の説明するように event を inside/outside の二つに分けて考察することは不自然であって、むしろ出

来事を理解するために分けるとするならば *what was done* と *why it was done* とに、換言すれば所謂一般にいわゆる歴史的出来事とそれを説明するための原因(条件)とみられる矢張り同じ意味での歴史的出来事の提示及びその両出来事間の関係から理解することの方が正しいとする立場を Gardiner は執る。このことは後で触れるように歴史的説明に於いて重要な意味をもつものである。

ところでこの出来事の 'inside, である思考の働き、すなわち物体やその動作(身ぶり)の背後にあってこれらを制御している精神的働きを強調すれば当然それを理解する方法として *insight, re-thinking* という特殊のアプローチを持込まざるを得ず、このこと自体秘儀性を暴露したものであるし、事実 Collingwood が捉えようとしたものは自分自身が攻撃したもの(物体及びその動作)と同じものであったし、*the inside of event* という陰喩を導入したために反って混乱を招き、論理上も非常に大きな無理を生ずるに至ったものと批判する。従って Gardiner は歴史的説明のために、出来事を *inside/outside* に二分する方法は文字通り蛇足であり、誤りを犯す因となるとして全面的に拒否したのである。

ここで Collingwood の *inside/outside* に関する論点は次の二つに分けて考えることができよう。一つは *inside/outside* 二分法の是非であり、他は *re-thinking* の可能性についてである。後者の問題に関しては多くの人がいろいろの角度から批判したり、擁護したりしているし、私もかつて簡単にふれたことがあるので何故 Collingwood が *inside/outside* なる区分法をたてることによって歴史を説明しようとしたかという前者の問題に限定して考察することにする。(cf. W. H. Walsh, *The introduction of Philosophy of History*. P.48~59; W. H. Dray, *Philosophy of History*. P.10~15)

以下この問題を検討するにあたって、歴史的出来事を説明するために何故 *inside/outside* 二分法を Collingwood が導入したかその理由について仮説を設け、それを具体的に解明してゆく過程の中で最も正当とみなされるものを見出すという方法を採用することにする。その仮説とは(A) "*inside/outside* 二分法は彼が実地の野外研究を通して修得した考古学的方法を歴史学の領域に応用した結果考案されたものである。、(B) "*inside/outside* 二分法は彼の歴史認

識論的見地から理論が初めに組織づけられて、それを考古学・歴史学に適用したものであって飽くまでも彼の理論的所産である。〕従って前者(A)では彼の考古学上の体験並びにその経験から案出された探究方法そのものが重視されるわけであり、後者の場合は Collingwood の “Thought,, (彼が All History is history of thought. とする際、その根底に置いた概念)、及び後になって明らかとなることと思うが、(歴史の対象を人間の心的活動とする立場から) 過去の人間の行為とその目的・意図との関係を理論的に規定する彼の “Causa,, の概念の分析が軸となるであろう。

II

先ず最初に Collingwood が考古学の野外研究で獲得した発想を歴史研究に導入し、そこから inside/outside 二分法が出たとする仮説をみてみよう。論を進めるにあたって W. B. Gallie の論ずるところを手掛りにすると、Gallie は次のように述べている。Collingwood はすべての権威を嫌い、又彼が余りにも改革主義的熱情に浮かされていたために歴史学を単なる科学的法則の適用以外の何ものでもないとした実証主義の立場に強く反撥して、真の科学的歴史の探究・発見に全勢力を注入した。ところが Collingwood がそのためにとった論理的プロセスの背後には彼の主たる研究対象であった後期ローマ史——特に Roman Britain の歴史——に於ては、その研究のための作業が主として考古学的証拠に基づかなければならなかったという特殊事情・制約があったこと、換言すると手掛りとなる資料が非常に制約され、又要求される思考が丁度診断医のそれと同じ——すなわち外的現象(肉体あるいはその運動)から内側の要因を探ぐるという考え方——であるというのである。(Philosophy and Historical understanding. P.18~19) もっとも Gallie は、Collingwood が他者から与えられた歴史的証拠に無批判に従うという権威主義を徹底的に嫌悪したという事実が彼の歴史を偏ったものにした決定的要因であるとするのであって、先に問うた仮説(A)の問題を直接考慮の対象としたのではない。Gallie によれば Collingwood が権威(事実を事実として無条件にそのまま認める態度)を排除しようとしたため、歴史事実そのものの意味、すなわち一つ一つの事実は歴史家がその先輩た

ちや史料から受継いでゆくところの、更に又、ある観点からした真実の証拠とみなさざるを得ぬところの物語（＝全般的文脈）という鎖を形成する一つの環であるということに目を覆ってしまったこと、そのために彼は事実を順を追って述べてゆくという歴史の基本的経験を無視した態度の中に歴史的説明の本質を考えたし、こうした態度をとったために **Collingwood** は問題解決 **Problem solving** 以外の思考の型をすべて排斥してしまうようになったと断定するのである。

Collingwood 自身この点についてどのように考えていたかという点、**narrative** そのものが確かに歴史に於ける重要な要素であることを決して否定しない。しかし唯それだけでは歴史と古生物学等の偽歴史との区別はできない、歴史の本質は事実の単なる時間的配列ではなくて目的的活動の敘述でなければならないとした。従ってその証拠は歴史家が目的によってそれを知り、こうした証拠そのものは何のためにあるかを理解するところまではっきりと証拠となるものを後に残した遺物から成立っているから (**R. G. Collingwood, An Autobiography, P. 109**)、歴史家はそこまで（目的的理解）立入って考察する必要があるというのである。これからすれば **Gallie** の論の後半すなわち歴史理解の根本は“敘述、にあるという立場を執り得なかったとする **Collingwood** 批判の部分には問題が残るが、前半の部分は仮説(A)に立つものと考えてよいであろう。すなわち **Collingwood** の歴史的説明の方法である **inside/outside** の出発点は彼の考古学研究にあるということ。この点について **Collingwood** 自身はどう説明しているであろうか。

「発掘物（それは **Hardknot** 城と呼ばれるローマ城塞の北塔での私の父の発掘であった。その時私は生後三週間にしかならず、大工道具袋の中に入れていたという）の最初の見学が普通のものでない何かあるものの可能性に向けて私の眼を開かせて呉れたなどと誇張するつもりはない。しかし私は次第次第に考古学的雰囲気が強まってゆく中で成長していった。父は絵描きとしては成功しなかったが年と共にだんだんと考古学研究に転じ、その方では立派な才能をもっていた。そうして学校の休暇に私はとうとう古代の陣地跡や耕作地と **eskers** や地質露出部とを区別する技術を修得し、未調査の地域の先史時

代の遺物の探索やそれらを発見した時に測量することを任されるようになり、
又 Romano-British 村の正規の発掘に父の助手として半年の間作業するまで
になったのである。

このことやそれに類似した経験が、『鉄と糊』は歴史方法の唯一の基礎ではないことを私に教えて呉れた。欲するのはこうした作業の十分に拡大され且つ十分に科学的な発展であったし、権威を信じていた歴史家にはその存在が永久に知られないまま残されたに違いない対象について、すべてではないにしても非常に多くのことを教えて呉れるだろうということが分った。……」 (An Autobiography.)
P. 80)

ここで Collingwood は inside/outside に直接触れてはいないが自分の経験に基づく考古学の探究方法を通して、権威（典拠）に頼る歴史学から脱却し歴史家は自己の知ろうとするものが何であるかを正確に定め、答がかくされているところの一片の土地とかその他何かあるものを発見し手段の是非を問わず答を出さなければならぬという立場へと一般化して考えたのである。すなわち考古学では地中から発掘された遺物・石片・泥土・金属片等から唯単にそれらを基にして年代づけをするのではなく、それらのものが‘何のために用いられたか、を理解することによって初めて、換言すれば‘目的の表現 expression of purpose, (An Autobiography.)
P. 108 とみなすことによって、証拠として使用できると考えたのである。

従って Collingwood は考古学と地質学や古生物学等とを区別すると同時に考古学と歴史学との間の方法論的一致について真剣に取り組んでいる。特に実証主義の功罪の中、徹底した証拠に関する正確且批判的調査に基づく詳細な歴史的知識の激増という功は、考古学的探究の仕掛けによることが大であるとした点、(Idea of History.)
P. 127 更には過去のそれぞれの時代の人々の心の中に入ってそのものになりきることができなければ歴史にはならないし、それを理解する方法は、その人達が道具を使用しているならば道具の使用という事柄の底には何らかの目的が蔵されていたわけだから、その目的を明らかにすること以外にない。逆にいうとこの道具こそはそれを作った人間の精神の表現 ‘expression

of thought, (^{ibid.,}
P. 200) と考えられるので、その立場からものを見るのでなければ歴史的理解は失敗すると考えた。すなわち歴史の新概念とは歴史事実——出来事——を作り出した人が考えていたそのものを知ること、換言すると《すべての歴史は思想の歴史である。》ということの意味し、そのためには現在の我々に残された歴史事実（書き、使用し、企劃したもの）を手掛りにして本質（inwardness）へと迫ってゆくこと以外に方法はないわけである。

この点は B. Croce が「自然の歴史、と歴史の関係について述べた点、すなわち「新石器時代のリグレ人またはシクロ人の真の歴史を理解した」と考えるか、もしそうなら何よりも先ずリグレ人やシクロ人になりきるように試みよ。もしそれができないならば、あるいはそうすることに意味を認めないならば、これらの新石器時代の人間が遺した当時の人々の多くの頭骸骨、日用道具、筆跡を記述分類し整理配列することで満足する外はないだろう。一枚の葉の茎の真の歴史を理解しようとするか、よろしい、何よりも先ず自分がその葉の茎となるように努めなさい。もしそれに成功しないならばその各部分を分解し、できればこれを一種の観念的・空想的歴史に配置することで満足する外ない。」という見解によりつつ、歴史性の基準をなすものは単なる出来事の配列ではなくこの inwardness への肉迫であると考えたのである。しかもこの場合確かに inwardness への過程は歴史的 Sympathy を通して行われる。唯ここで注意しなければならない点は、この inwardness を主観的な働きとしての Sympathy のみによって知ることができるものとする Collingwood の inside/outside 論は C. Hempel や Gardiner が断定したように歴史的説明には何ら益することのない陰喩として非難の対象となるだけだが、Dray も評しているように飽くまでも inwardness や inside を導入した意図は歴史家の使用する正当性乃至は結びつけの基準、(^{The Philosophy of}
History. P. 13) 行為に対する明瞭の基準(^{ibid.,}
P. 12) としてであると解すれば、先にもみた Collingwood 自身の主張(^{Idea of History,}
P. 200)とも合致し、従って inside/outside 論はこの線に沿って考察するのが妥当だと思う。

以上のようにみてくると、歴史学とは結局 Collingwood によれば彼のいう *causa ut* の解明であることになり、これから考えて考古学の野外研究に早く

からなじみ、考古学研究の態度——～のために道具を用いようとしたが、その意図を推定するという立場——との二つが相互にからみ合って ‘inside, という概念が導き出されたことは明らかである。

III

ところで一方 F. G. Simpson は先の Gallie の見解—— Collingwood の研究対象が Roman Britain 時代という考古学的資料に負うことの多いものであったため、遺物・遺跡を手掛りにしてこれらが生ずる因となった意図・目的を問うことが彼の歴史研究の第一義となったということ——とは異って逆に、Collingwood は解答を予め定めることを認めるような問を先ず設定するという姿勢、換言すると研究は有益且つ系統立った問によって進めらるべきであるという誤った推論に基づいて、これを野外研究（特に発掘）にあてはめようとしたと考える。すなわち Collingwood の考古学研究を歴史理論——（実際の）考古学的発掘という方向で捉え、しかもその間に野外研究に従事するものはどんなに細心の注意を払って発掘を進めても、それは丁度常に暗闇の中で作業するようなもの、すなわちそれは期待されるものと全く期待もしないものとが入りまじった状態であり、従って Collingwood の示した考古学者としての心構えである“捜し求めないものは見ない”は誤謬であるとして非難した。

(Proceedings British Academy.)
(XXIX. P. 478-479)

ところがこの非難は次のことを充分に読みとらなかったために生じたものと私は考える。すなわち既に前もって明白な事柄は何も今更改めて探し求める必要のないことは勿論のことであり、こうしたことよりも Collingwood が力説した点は、証拠というものはその中から答を引出すことができてはじめて有用であるから我々が問を発する出発点となる証拠（遺物）に関して不確定ではあってもある概念を歴史家は持たなければならないということにあったと解すべきであろう。そうして、その証拠についての漠然とした概念は Collingwood によると彼の《「問と答」の論理》によって次第に明確にされてゆく性質のものである。ところが Simpson はそれを発掘そのものに於てみようとした。考古学に於ける発掘は確かに Simpson のいうように暗闇の中での作業と同じで

全然予期しないものが出てくる可能性が大であるにはちがいないが、Collingwood がこれを見殺ししたとみるのはあたらす、彼は何の問題意識もなく唯やたらと掘ることは発掘前にある一定の枠をはめて作業することと同様に如何に危険であるかということに専ら注意を向けさせたものと解すべきであろう。

ところで本項の主題にもどって、Collingwood の理論から inside/outside 二分法が案出されたという仮説(B)についてみると、Collingwood は人間の出来事の科学としての歴史 (An Autobiography, P. 115~116) は人間の意志・目的達成のあらわれと考え、従って歴史理解とはこうした過去の人間のめざした目的や意志——より一般的には思考——を歴史家が再行することであった。更に立入って考察すると、自然現象とは異って意識的、判断力をもった人間の自由且つ計画性のある行為によって人間の出来事——歴史——は進展させられるのであるから、こうした人間の行為の背後には行為者の計画性が働いているとし、この計画性こそ出来事を形づくる原動力であるとした。従って、そう行動するようにしむけるということはそうするための動機を生起させることでもある。(Collingwood,

An Essay on
Metaphysics. P. 290)

このように考えてくると一つの出来事があらわれるためには計画性という働きが不可欠であり、そこから人間活動としての出来事を理解するには、その人間の計画性を究明する以外に方法はないであろう。Collingwood は歴史的出来事は目的乃至ある成果となるべき(将来の)事態 state of things である causa ut (目的因)とその人間の位置する立場——情況——あるいは現在の事態の causa quod (期成因)の二つから成立っており、その説明はこの関係からなさるべきであると考えていたようである。しかも causa quod はその人との関係を見殺しした単なる現在の事態ではなく、飽くまでもその本人によって存在が認知され確信されたものである。すなわち計画性はこの causa ut から causa quod へと働くこと、又目的達成のために情況 situation への働きかけが人間の自由な意志でなされ、その結果、現実の出来事という形あるものとしてあらわれてくると解される。(前出の expression of purpose) つきつめていえば causa quod は文字通り出来事の出現とみることができよう。現実の人間事象

の生起の過程をこのようにみてくると、我々に具体的把握できるものはただ *causa quod* のみである。

先述した通り Collingwood は *causa ut* と *causa quod* の二つがなければ歴史的出来事は生起しないとする点は、歴史的出来事は‘外側、と‘内側、の両者に歴史家が関らなければならないとすることと完全に一致し、歴史理解の窮局のものは出来事を生起せしめた歴史上の人物の懷いた目的をつきとめることにあったから、それを発見するには1) *causa ut* → *causa quod* というプロセス、2) *causa ut* = inside of event; *causa quod* = outside of event、3) 観察し、認知しうるものは *causa quod* である、ということから当然 *causa quod* (知られるもの) → *causa ut* (知られざるもの) = outside から inside へというプロセスをとらなければならない。ところで *causa ut*, *causa quod* と inside of event, outside of event の両者を重ね合わせてみると次のようになる。

<i>causa ut</i>	<i>causa quod</i>
inside of event	outside of event
(intention)	(situation)
purpose	expression of purpose

(尚 Collingwood が *causa quod* を situation との関係に於て捉えたと断定するためには更に詳細に問題を追求してゆかなければならない。すなわち上記の *purpose* を中核として、それを達成するための *intention* という心的働きとその表出としての *situation* で歴史的出来事が構成されるとする Collingwood の立場は covering law theorists の考える歴史的出来事の説明——*explanans* と *explicandum* との関係から把握——と著しく異なる。)

causa quod について Donagan はこれは人間が行動する際のその人の立場に関する評価(見込み)であると理解しているが、更に一步進めて *causa quod* を Collingwood 自身の解釈——情況あるいは現在の事態、それもその情況にいる人が認知したもの——の *state of things existing* の方に力点を置いてみると、単なる見込みよりは具体的な事実・運動と考えることはできないだろうか。これは一方で outside を Collingwood が it can be described

in terms of bodies and their movements (Idea of History. P. 213)と規定していることと考え合わせると一層明らかとなろう。事実 Donagan も *causa ut* の内容について、これは計画だけでなくより具体的な方策（計画実現のための現実への対応という積極的活動）を含めて考えようとしているから (The Later Philosophy of Collingwood. P. 192~193) これから推しはかると *causa quod* は上述のように解することも可能である。

ところでこの項(Ⅲ)で展開した推論が許されるならば歴史的出来事を *in side/outside* に分けたことについての論理的説明は一応成立つであろう。ただ残る問題は Collingwood が歴史を説明する際に実際上の手段として *causa ut*, *causa quod* を用いないで殊更 *inside*, *outside* をあてた根拠は何かということである。なおまたこうした中から判断すると、理論的立場から Collingwood のいう史料に基づく歴史的説明（その窮局は歴史上の人物の意図した目的の解明にある）——広義の歴史敘述——という実践へと向うという仮説(B)は可成の説得力をもち、強いて彼自身が述べている考古学に於ける野外研究での経験をここに持込む必要は論理的にはないとみてよいかも知れない。しかしこの問題を一層すっきりと解決するために今度は少し角度を変えて Collingwood の実際の歴史敘述の内容に目を移して検討することにする。（未完）

（昭和40年9月30日受理）